

## 8. 促成ナスのミナミキイロアザミウマの薬剤感受性の経年変化

### [要約]

県南の促成ナスに発生するミナミキイロアザミウマの薬剤感受性を調べた結果、平成21年度と比べて、新たにプレオフロアブルの感受性低下が認められた。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話086-955-0543

[分類] 情報

---

### [背景・ねらい]

岡山県の促成ナス栽培では、ミナミキイロアザミウマの果実被害が多く、薬剤の防除効果が低下していることが考えられるため、平成21年度に本虫の薬剤感受性を明らかにした。薬剤感受性は現地の薬散状況によって変化することから、6年経過後の感受性を調査し、効率的な防除対策に資する。

### [成果の内容・特徴]

1. 平成21年度と同様に、すべての採集個体群の成幼虫に対して補正死虫率が高い薬剤はアファーム乳剤1剤のみである（表1）。
2. ネオニコチノイド系薬剤については、平成21年度では、ほとんどの個体群について補正死虫率が30%以下と著しく低かった。平成27年度でも同様に、すべての採集個体群の成幼虫に対して補正死虫率30%以下と著しく低い（表1）。
3. プレオフロアブルは、平成21年度では殺虫効果が認められていたが、平成27年度ではすべての採集個体群の成幼虫の補正死虫率が20%以下であり、感受性の低下が顕著である（表1）。
4. ラノー乳剤は、平成21年度では殺虫効果がほぼ認められなかったが、平成27年度では幼虫の補正死虫率が60%以上であり、感受性の回復が認められた（表1）。

### [成果の活用面・留意点]

1. 薬剤感受性の低下を防ぐため、同系統の薬剤の連用は避ける。また、ミナミキイロアザミウマの防除対策として防虫ネットの展張や天敵の放飼など、化学合成農薬のみに頼らない防除体系が有効である。
2. 天敵を利用している圃場では、天敵に対する影響が小さい薬剤を使用する。
3. ラノー乳剤は、防除を数回行うだけで感受性は再び急激に低下する可能性がある。

[具体的データ]

表1 ミナミキイロアザミウマの成虫及び2齢幼虫に対する各種殺菌剤の殺虫効果（2015年）

供試薬剤名（剤型）	希釈倍数	補正死虫率（%） <sup>y</sup>					
		岡山市①		岡山市②		笠岡市①	
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫
<b>ネオニコチノイド系</b>							
ベストガード（水溶剤）	1,000	2.7	12.5	-	0.0	-	0.0
モスピラン（顆粒水溶剤）	4,000	2.3	0.0	-	0.0	-	12.0
<b>スピノシン系</b>							
スピノエース（顆粒水和剤）	2,500	9.3	2.6	-	6.9	-	95.0
ディアナ（SC）	2,500	16.3	2.4	-	14.3	-	97.8
<b>マクロライド系</b>							
アグリメック（乳剤）	500	41.3	53.3	-	65.1	-	90.7
アフアーム（乳剤）	2,000	92.5	90.2	-	100	-	93.2
<b>その他の系統</b>							
コテツ（フロアブル）	2,000	0.0	0.0	-	13.9	-	33.4
プレオ（フロアブル）	1,000	0.0	2.6	-	11.6	-	14.0
モベント（フロアブル）	2,000	- <sup>x</sup>	79.3	-	-	-	59.2
ラノー（乳剤）	1,000	-	83.4	-	-	-	63.6

<sup>x</sup>検定は葉片浸漬法で行った. 総供試個体数38~74頭

<sup>y</sup>死虫率はAbbottの補正式による24時間後の値. ただし, ラノーとモベントについては144時間後の値

<sup>z</sup>検定未実施

[その他]

研究課題名：促成栽培ナスのミナミキイロアザミウマに対する新たな天敵を組み合わせた  
総合防除体系の確立

予算区分：交付金（病害虫防除農業環境リスク低減技術確立）

研究期間：2013~2015年度

研究担当者：西 優輔、松岡寛之、長森茂之

関連情報等：1）西ら（2013）九病虫研会報、59：81-85

2）平成26年度試験研究主要成果、[51-52](#)

3）平成26年度試験研究主要成果、[55-56](#)